

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Genitive of Time in Medieval Russian Chronicles

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, OKAMOTO, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1877

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中世ロシア年代記における時の生格

岡本 崇男

1. はじめに

時間を意味する名詞の生格形が前置詞なしで使用されていて、それが動作や事態の起る時間を表している時、それを「時の生格」(gentivus temporis –以下GTと略記する)と呼ぶ。GTは現代ロシア語においてすでに完全に生産性を失っており、сегодня「今日」のような副詞、третьего дня「一昨日」のような慣用表現、そして первого мая「5月1日に」のような日付の表現のみにその名残を見ることができる。18世紀初期の実務的な文書におけるGTを研究したGrannes (1986)によると、GTはふつう限定語を伴っており、古代ロシア語では語彙と限定語の種類に一定の制限があるものの、比較的広範囲に使用されていて、18世紀初期の実務文書では古代ロシア語よりもGTとなる語彙の種類が増加したことが示唆されている(p. 58)。しかし、ここで注意しなければならないのは、Grannesが拠り所とした古代ロシア語に関する情報は、中世ロシアの実務文書ではなく、年代記のテキストを資料にした研究¹から得られたものである。年代記テキストは、基本的に教会スラヴ語の統語法を遵守している。一方、以下に示すように、18世紀初期の、つまりピョートル時代の実務文書には安定した言語規範というものが存在していないという主張がある。

ピョートル時代の言語の状態は、ある種の言語的「無人島」だと考えて良いのかもしれない。つまり、既存の伝統的な言語表出手段では、政治、技術、軍事、行政および社会の各分野における急速な発展についていけない状態だったのである。この時代には、安定した行政言語がなく、また支配階層においてもスタイルが統一された話し言葉が生まれていなかった。この政治的に極めて重要であった時期がロシア語の発達に対して持っている肯定的な意義が何かとえば、それはこの時期がロシア語の発達における明確な区切りであり、やがて現代ロシア語が成立して豊かさを増し、近代ヨーロッパの一国家のエリート階層の言語として高次の要求を満たせるようになるための前提条件のようなものがこの時期に作られたとい

1 古代ロシア語におけるGTの使用に関してGrannes (1986)が依拠した文献はC. Robert, *Contribution à l'étude de quelques complements de temps en russe moderne*. Paris. 1964である。

うことに尽きる。ただし、次の世紀もロシア標準文章語の成立過程における最終的な安定状態をもたらすには至らない。(Issatschenko (1983), p. 561)

中世ロシア年代記と18世紀前半の実務文書、そして現代ロシア標準語は、お互いに言語規範の性格が異なっているため、それぞれにおけるある言語現象の存在を実証する例の多寡を単純に比較することはできない。しかし、年代記テキストにGTがある程度普及しており、実質的な言語規範が欠如していた18世紀初頭の実務言語にGTの例が増加したが、現代ロシア語の規範から除外されてしまったという諸事実の背景には、東スラヴ人の言語意識におけるGTの位置付けが時間とともに変わったことが想像される。本論文では、中世ロシア年代記に見られるGTについて、個別の年代記間の規範意識の違い、一つの年代記テキストにおける規範意識の変化という観点から検証していきたい。

2. 年代記テキストにおけるGTの起源

GTは現代ロシア語において全く生産性がないのだが、中世ロシア語では時間表現の手段として一定の地位を保持しているということから、生格のこの用法が古風な言語特徴に属すると考えて差し支えなさそうである。ところが、現代ロシア語に見られる数少ない使用例は、中世ロシア語の書き言葉から継承されたものではない。例えば、中世ロシア語において「今日」を意味する副詞は *дньсь, днесь* であって、*сии днь* 「この日」の生格形 *сего дне (дни)* ではなかった。現在刊行中の『11-17世紀ロシア語辞典』には *СЕГОДНЯ* が見出し語となっているのだが、この辞書項目に記載されている用例の出典は、最も古いもので16世紀の年代記写本であり (*И рече имь князь: братие и дружино, сегодне нам двое предлежить, или добро или зло* 「そして、公は彼らに言った。『兄弟よ、従士たちよ。今日わたしたちの前には二つのものがある。善か悪である』)、その他はすべて17世紀に外国人によって編纂された会話帳である。また、日付の表現も中世ロシア語では、例えば「5月1日に」であれば、*месяца мая в первый день* と表現するのが一般的であった。つまり、月の名前と月を表す名詞は生格形なのだが、日は対格形で前置詞 *в* を伴っていなければならなかった。従って、現代ロシア語におけるGTの「残存形」は過去の文語の伝統を受け継いだものではなく、むしろ口頭のコミュニケーションの中で発達した形式の名残である可能性が高い。

сегодня が口語の語彙であるという主張に対しては反論があるかもしれない。実際にハインリヒ・ルドルフの『ロシア語文法』(1696年)では、「大多数のロシア人は、無学と思われないうために、言葉をそれらが発音されるように書

かずに、教会スラヴ語文法に則って書かれるべく書いている。例えば、彼らは *сегодня* と書き、*севодни* と発音する² と述べられている。しかし、現在に至るまで *сегодня* が教会スラヴ語の語彙になったことはない。ルドルフは、書き言葉と話し言葉が遊離していた17世紀末のロシアの言語生活を説明するための具体的な例を日常語の語彙に求めたのだと思われる。

それでは、中世ロシア文語の伝統において GT は時間表現の中でどのような地位を占めていたのだろうか。この質問に対する答えは、Ломтев (1956) の記述から得ることができる。同書の第8章第1節「前置詞を伴わずに空間の意味を表している格形式の使用の制限と衰退」の § 117 に、時間を表す生格に関する説明がある。これによれば、GT は「行為に完全には占有されていない時間の量」(“количество времени, не полностью занятого действием”) を表し、GT となる名詞は日や一日の部分の名称、四季の名称、月の名称で (того же дне 「同じ日に」、той весны 「同じ年の春に」、той ночи 「その日の夜中に」、месяца марта 「三月に」など)、このような生格用法は「古期のあらゆる古代ロシア語文獻に見られる」。そして、生格のこの用法は、「古代ロシア語が受け継いだ」ものだというのだが、何から受け継いだのかは書かれていない。ただし、古教会スラヴ語における GT の例が紹介されているので、この用法はもともと古教会スラヴ語のものだと Ломтев は考えているのだろう³。

ところが、古教会スラヴ語において GT は、この言語に典型的な時間表現の手段と言えるほど出現頻度が高いわけではない。例えば、古教会スラヴ語の詳細な統語論を著した R. ヴェチェルカは「行為・活動が行われる時期を意味するものとしての前置詞を伴わない時間の属格 (= GT-岡本) は、古教会スラヴ

2 “Quaquam autem plerique Russi qui Idotae videri nolunt, vocabula scribere solent, non ut efferuntur, sed sicuti secundum Grammaticam Slavonicam scribi deberunt; v. g. scribunt *сегодня segodnia hodie*, cum tamen pronuncient *севодни sevodni*” (Larin (2002), p. 546).

3 ちなみに、§ 112 には「古代ロシア語において移動の動詞が転義で用いられている時に、時間の概念を表す名詞が生格で使用されることがある。そして、この場合、生格は文法的に達成の対象を表している」という説明があり、これに続いて以下のような例が示されている。

Феодосееви же пришедшу по обычаю братью цѣлова, и празднова с ними недѣлю Цвѣтную, и дошедъ велика дне Воскресенья, по обычаю празднова свѣтло, (и) впаде в болѣзнь. Лавр. л., 181 (フェオドーシーは到着すると慣習に従って兄弟たちに接吻し、彼らとともに復活祭の前の週を祝い、復活の大斎の日が来ると、慣習に従って厳かに祝い、(そして) 病に倒れた); Багрянородный царь Константинъ дошедъ мужескаго возраста... къ себѣ скипетръдръжание припасти сотвори. Никон. л. 27. (皇帝コンスタンティノス・ポルフュロゲネトスは成人の年齢に達すると…王笏を持つ権利が自分の手に入るようにした)

これらの例は、動詞 *донти* 「到達する」の能動過去分詞男性単数主格形 *дошедъ* の要求に応じて時間を意味する名詞が生格形になっているのであって、いわゆる「時の生格」の例ではない。

語にはほとんど知られていない」と断言して、「唯一の例」として『スプラシル写本』の一節を挙げており⁴ (Večerka (1989), p. 291)、典型的な時間表現の方法としては、前置詞を伴わない名詞の対格形および前置詞 **въ** + 対格形の例⁵を紹介している (同, p. 292)。また、ヴェチェルカによれば、古風な用法に属するが、時間表現の方法としては前置詞を伴わない所格の方がよく使われるという⁶ (同, p. 292)。

生格を時間表現に使用することが古教会スラヴ語に馴染まなかったことは、新約聖書のギリシャ語テキストと古教会スラヴ語テキストを比較すればよく理解できる。一般に、古教会スラヴ語訳新約聖書はギリシャ語原典の逐語訳的な性格が強いことが知られている。これは語順に限らず、ギリシャ語における形態上の区別もできるだけ原典に忠実に再現する努力が屢々なされている。ところが、新約聖書ギリシャ語テキストでは頻繁に現れる時間の属格 (= GT) に対して古教会スラヴ語の訳文では生格が使用されていないのである。例えば、

[例1] ギリシャ語 : νηστεύω δις τοῦ σαββάτου <属格>, ἀποδεκατῶ πάντα ὅσα κτῶμαι. (ルカ18,12)

古教会スラヴ語 : пощѣ сѧ вѣ. краты **въ сѧботѣ** <前置詞句>. десѧтинѣ даѣж всего елико прѧтаѣжѣ. 『サヴァの本』

「わたしは週に二度断食をしております、全収入の十分の一を税として納めています」

[例2] ギリシャ語 : οὗτος ἦλθεν πρὸς αὐτὸν **νυκτός** <属格> καὶ εἶπεν αὐτῷ: Ραββί, οἶδαμεν, ὅτι ἀπὸ θεοῦ ἐλήλυθας διδάσκαλος οὐδεὶς γὰρ δύναται ταῦτα τὰ σημεῖα ποιεῖν ἢ σὺ ποιεῖς, ἐὰν μὴ ἦ ὁ θεὸς μετ’ αὐτοῦ. (Io 3,2)

古教会スラヴ語 : съ приде къ нему **ноштиѣ** <造格>. и рече емоу равѣвии. вѣмѣ ѣко отъ б(ог)а пришелъ еси оучитель. никтоже бо не можетъ знамении сихъ творити. ѣже ты твориши. аще не бѣдетъ б(ог)ъ съ нимѣ. 『マリア写本』

「この人が夜彼 (=イエス) のところにやって来て、彼に言った。『先生、わたしはあなたが神から来られた先生であることを知っています。あなたが成されたよ

4 『スプラシル写本』 279, 13-15: отънѣже сѣ потрѣбѣ миѣгъскыиѣхъ. **осмааго** на десѣте своје вѣгъсты лѣта 「(彼は) 18歳の時に世俗の欲を捨てた」。

5 前置詞を伴わない対格の例 : 『スプラシル写本』 291, 13-14: възврати сѣ **третii днь** гладѣмѣ тѣгъу 「(彼は) 三日目になって上で死にそうになって帰ってきた」。

前置詞を伴う例 : マタイ24, 43: **въ коѣоу страѣоу** тѣтѣ прѣдетъ 「どの時間帯に泥棒がやって来るのかを」。

6 マタイ24, 20: molite že sѣ da ne бѣдетъ бѣство ваѣ **зимѣ** 「あなた方が逃げるのが冬にならないように祈りなさい」。

うなこれらのしるしは、もし神が共にいなければ、誰も成すことができません』

例1ではギリシャ語の属格に古教会スラヴ語の前置詞句が対応しており (τοῦ σαββάτου — въ сѣботѣ)、例2では造格が対応している (νυκτός — ноштиѣ)。このようにギリシャ語のGTが古教会スラヴ語のGTで再現されることはなく、必ず違った形式で翻訳されるのである。さらに、νυκτός καὶ ἡμέρας「昼も夜も」(マルコ5, 5、ヨハネ11, 9)には前置詞を伴わない対格形 день и ночьが当てられ、τῆς ἡμέρας「一日(の中)に」には前置詞と所格の結合 въ дьниが当てられるというような例を挙げることができる。

以上のことから、古代ロシア語におけるGTは、古教会スラヴ語から受け継がれたものではない、つまり文語の伝統に属するものではないと言わざるを得ない。そうだとすると、GTは東スラヴ語が本来持っていた言語特徴であったということになる。

3. 年代記における時の生格

3.1. 使用する年代記資料と調査の対象となる語彙

年代記は古代ロシア語文献の中でもっとも数が多いため、成立した時代と流派の違いが言語に現れる。また、年代記は複数の書き手によって作られていることが珍しくなく、編纂にあたって様々な時代に様々な地域で書かれた記録を原資料としている可能性があるため、一つのまとまった文献であっても言語特徴に統一性があるとは限らない。本論文では、資料として二つの典型的な年代記を選んだ。一つは1377年に成立した『ラヴレンチー年代記』(これ以降 Лавр と略記する)で、教会スラヴ語の規範に習熟した書き手によって書かれている。特に、前半部を構成する『過ぎし年月の物語』(または『原初年代記』、これ以降 ПВЛ と略記する)は年代記集成という性格を帯びており、様々な書き手による記録を基礎資料にして編纂されたために、言語的な純粋さは保障されないかもしれないのだが、模範的で影響力のある年代記としての価値を持っている。もう一つは13-14世紀に書かれたと『ノヴゴロド第一年代記・古揖』(これ以降 Нови と略記する)である。この年代記は、Лавр ほど凝った統語法が使われておらず、東スラヴ語の要素も多く含まれていると言われているのだが (Issatschenko (1980), p. 201)、ノヴゴロド以外の書記伝統の影響をあまり受けていないため、言語習慣の変化をテキスト上で確認できるという利点がある。また、この年代記の写本は、現存するロシア年代記写本のうちで最古のものであり、この年代記が書かれた時代(13-14世紀)の言語規範を知るための資料として期待できる。なお、Лавр の後半部は『スーズダリ年代記』(これ以降 Сузд

と略記する) と呼ばれており、本論文では ПВЛ と区別して独立した年代記として扱う。

年代記テキストにおいて GT を形成する語彙はそれほど多くない。本論文で扱うのは лѣто 「年」、夏、зима 「冬」、весна 「春」、осень 「秋」、мѣсяць 「月」、недѣля 「週」、主日、день 「日」、昼、ночь 「夜」である。月の名称 (генварь 「1 月」、февраль / февраль 「2 月」など) は、単独で生格形になることがほとんどなく、ふつうは мѣсяць が前置されるか、稀に後置されているので調査の対象としない。なお、曜日の名称 (понедѣльник 「月曜日」、вторник 「火曜日」など) と утро 「朝」および вечер 「夕方」は GT を形成しない。

3.2. лѣто 「夏」、年

年代記テキストにおける лѣто は、「夏」あるいは「年」の意味で使われる。この単語が季節の名称として使用されているかどうかを判断するのは必ずしも容易なことではないのだが、他の季節と対比されていることが文脈から確認できる場合は明らかに「夏」の意味を表していると断定しても構わない。

例えば、

[例 3] тоеже зимы. той посласта Берестию брата на головнѣ. иде бяху пожгли. той ту блюдь городъ тихъ. та идохъ Переяславлю о(тъ)цю. а по Велицѣ д(ь)ни ис Переяславля та Володимерю. на Сутеиску мира творить с Ляхы, откуда паки на **лѣто** Володимерю опять. (ПВЛ 6604, 81)⁷ 「その年の冬に、二人の兄弟が(わたしを)彼らが(=リヤヒが)焼いたベレスチェの焼け跡に派遣し、わたしはそこで町を平和に保った。そしてわたしはペレヤスラヴリの父の元に行き、復活祭の後ステイスクでリヤヒと和を結ぶためにペラヤスラヴリからヴラヂミリに行った。そこからわたしは夏に再びヴラヂミリに戻った。

また、他の季節の名称が現れていなくても、それに代わる季節を表す表現によって(例えば、月の名称などによって)時間の経過がわかる時には、やはり лѣто が「夏」を意味していることが明らかとなる。例えば、

7 年代記テキストから引用した実例が見つかった箇所は“(年代記名 年, ページ)”という形式で示す。年代記名は ПВЛ (『過ぎし年月の物語』)、Сузд (『スーズダリ年代記』)、Новл (『ノヴゴロド第一年代記・古輯』) のいずれかである。年は 4 桁の数字で 5508 を引くことで一般的な西暦年が求められる。ページ数は、例えば、2 であれば羊皮紙の第 2 葉表、2v であれば第 2 葉裏であることを意味している。

[例 4] **въ то же лѣто** мѣсяця априля въ 15 съгорѣ церкви от грома святого Николы на Городищи; и ста всѣ **лѣто** дъжгево. (Нов.I 6709, 63) 「同じ年、4月15日にゴロジシチェの聖ニコラ教会が雷で消失した。そして夏中雨が降った (=雨の夏だった)」

しかし、ほとんどの場合、**лѣто** は「年」を意味している。そして、この単語の場合、「…の年に」という意味を表すもっとも一般的な形式は前置詞 **въ** と対格形 **лѣто** によって作られる前置詞句 **въ лѣто** である。中世ロシア年代記の記事も “**въ лѣто 6658**” (「6658年に」) のように、この前置詞句で始まる。以下にいくつか例を挙げる。

[例 5] **В лѣт 6477**. Реч С(вя)гославъ къ м(а)т(е)ри свои. и къ болярюмъ своимъ. не любо ми есть в Киевѣ быти. хочю жити с Переяславци в Дунаи. яко то есть среда в земли моеи. яко ту вся бл(а)гая сходятся. (ПВЛ 6477, 20/20v) 「6477年。スヴァトスラフは自分の母と自分の大貴族たちに向かって言った。『わたしはキエフにいるのが好きではありません。わたしはペラヤスラヴリの人々とともにドナウの地に住もうと思っています。なぜならそこはわたしの国の中心地であり、全ての良い物がそこに集まるからです』

[例 6] **В лѣт 6658**. Гюрги князь поваби Вячеслава на столъ Киеву. пришедшу же ему Киеву. боляре розмолвиша Гюргя. и рѣша брату твоему Києва не удержати. да не будет его тобѣ ни тому. Гюргеви же послушавшю боляръ. выведь из Вышегорода с(ы)на своего Андрѣа. и да и Вячеславу. (Сузд 6658, 108v) 「6658年。ユーリー公はヴァチスラフをキエフの公座に呼び招いた。彼がキエフに到着すると、大貴族たちはユーリーを諫めて言った。『あなたの兄弟はキエフを治められません。あの方はあなたのためにはなりません』と。ユーリーは大貴族たちの言うことを聞いて、ヴィシエゴロドから自分の息子アンドレイを連れて来て、彼をヴァチスラフに与えた」

[例 7] **Въ лѣто 6658**. Приде архиепископъ Нифонтъ ис Києва, пущень Гюргемъ княземъ; и ради быша людьє Новѣгородѣ. (НовI 6658, 26v/27) 「6658年。大主教ニフオン트가ユーリーに許されてキエフから帰ってきた。そしてノヴゴロドで人々は喜んだ」

лѣто の生格形 **лѣта** が時間の意味で使われる時、この生格形は必ず限定語 **того же** 「同じ」を伴っている。**того же лѣта** は中世ロシア年代記テキストにおいて最も出現頻度の高い「時の生格」の形式である。この GT と同義的な形式

は、前置詞句 **въ то же лѣто**, **въ се же лѣто** と前置詞を伴わない所格形 **томъ же лѣтѣ**, **семь же лѣтѣ** などがある。一見すると一つの年代記の中でこれらの時間表現の形式が競合関係にあるように思えるのだが、それぞれの形式がテキスト中に現れる頻度と分布には特定の傾向が見られる。以下に若干の例を示しておく。

[例8] **Того же лѣта** присла великий князь Всеволодъ въ Новгородъ, река тако. въ земли вашей рать ходить, а князь вашъ, сынъ мой Святославъ, малъ; а даю вы сынъ свои стареишии Костянтинъ. (НовІ 6713, 72) 「同じ年に大公フセヴォロドがノヴゴロドに人を遣わしてこう言った。『あなた方の国で敵軍が徘徊している。ところがあなた方の公であるわたしの息子スヴァトスラフは幼い。だからあなた方にわたしの長男コンスタンチンを与えよう』と」

[例9] **Въ се же лѣто** прѣставися Добрына, посадникъ новгородьскыи, декабря въ 6 (НовІ 6625, 9v) 「この年にノヴゴロド市長官ドブリナが逝去した。12月6日のことだった」

[例10] **Въ то же лѣто** прѣставися рабъ божи Парфурин, а мирьскы Прокша Мальшевиць, постригъ ся у святого Спаса на Хутинѣ, при игумене Варламе. (НовІ 6717, 73) 「同じ年に神の僕パルフリー、俗名プロクシャ・マリシェヴィチが逝去した。フティニの聖救世主教会で剃髪した。修道院長がヴァルラムの時であった」

[例11] **Семь же лѣтѣ** побѣдиша Ярослава Морѣдва Муромѣ (НовІ 6611, 6v) 「この年にモルドヴァ人たちがムーロムでヤロスラフに勝利した」

[例12] **Томъ же лѣтѣ** бесѣ князя и без новгородьць Новѣгородѣ бысть пожаръ великъ. (НовІ 6719, 77) 「同じ年に公とノヴゴロドの人々がいない時にノヴゴロドで大火事があった」

Лавр の場合、前半の ПВЛ と後半の Сузд とでは、時間表現の形式の出現頻度が異なっている。ПВЛ においては **въ се же лѣто** の出現頻度が圧倒的に高く (41例)、これに次いで **томъ же лѣтѣ** (12例)、**въ то же лѣто** (9例)、**въ семь же лѣтѣ** (5例)、**въ семь же лѣтѣ** (1例) が現れるのだが、GT の例である **того же лѣта** と **сего же лѣта** はそれぞれ 2例と 3例しか見つけることができない。一方、Сузд では **томъ же лѣтѣ** が10例、**въ томъ же лѣтѣ** が 5例、**въ се же лѣто** が 7例、**въ то же лѣто** が64例であるのに対して、**того же лѣта** は172例ある。つまり、GT の比率が ПВЛ と Сузд では逆転しているのである。また、ПВЛ では「同じ年に」という意味の表現形式が 6種類あるのに対して、Сузд では 4種類

に整理されてしまっている。しかし、「同じ年に」という表現の出現数の合計が ПВЛ では93例であるのに対して、Сузд では258例である。つまり、後者では表現の種類が減少するのだが、使用頻度は格段に高くなっており、特に、*въ то же лѣто* と *того же лѣта* の出現数が突出している。(併せて236例)。ПВЛ そのものは Лавр が書かれた14世紀後半よりも前に成立しているのも、もし原資料の言語特徴が後世の編纂者にも受け継がれたと仮定すれば、「同じ年に」という表現は、時間の経過とともに多様性が排除されて、少数の形式が定式化されたと考えることができる。

それでは、各形式の分布について検証してみよう。Лавр は全部で260枚の羊皮紙から成り立っており、そのうちの第1葉表から第96葉裏の途中までが ПВЛ、第96葉裏の途中から第260葉裏までが Сузд である。分量の上では ПВЛ と Сузд はあまり差がなく、物理的には「前半部」と「後半部」と表現しても差し支えない。「同じ年に」という表現が初めて登場するのは、ПВЛ 945年の記事の *въ се же лѣтъ* (14表⁸) で、次の例は、980年の記事の *въ семь же лѣтъ* (26表) である。ПВЛ の前半部にはこれら2例しかない。そしてこの表現が徐々に現れるようになるのは1000年の記事(第44葉裏)からである。つまり、988年のヴラヂーミル公による「ルーシの洗礼」までの記録には、「同じ年に」という表現がほとんど使われていないのである。GT の形式である *сего же лѣта* と *того же лѣта* の最初の例は、それぞれ第67葉表と第69葉裏に現れ、これらは前置詞を伴わない所格形 *сѣмь же лѣтъ* (第94葉表) や *томь же лѣтъ* (第81葉裏) よりも前の時代の記事に現れているのだが、出現頻度は極めて低い。そして最後に *въ то же лѣто* が第75葉裏に現れる。なお、1例しかない *сѣмь же лѣтъ* 以外の表現は、頻度の差があるものの ПВЛ のほぼ最後のページまで使用されている。

Сузд における「同じ年の」という表現の分布は、ПВЛ のそれとはかなり違った様相を呈している。既に述べたように、表現の種類が減ったのだが、Сузд で使用されなくなった表現には共通した特徴がある。すなわち、ПВЛ で観察された6種類の表現のうち、限定語として指示代名詞 *сии* 「この」が使われているものが4つあるのだが、そのうちの3つ (*сѣмь же лѣтъ*, *въ сѣмь же лѣтъ*, *сего же лѣта*) が使用されなくなり、その代わり *въ томь же лѣтъ* が出現したのである。もしかすると、ПВЛ の原資料が書かれた時代には *се же лѣто* と *то же лѣто* との間には意味の違いがあったのかもしれないが、Сузд の原資料が書かれた時代には2つの表現間の意味の違いが感じられなくなっていたと推測する

8 「14表」は例が見つかった箇所が年代記の第14葉の表側であることを意味している。羊皮紙は両面が使われるので、裏面に書かれている場合は「14裏」のように表現する。

ことができる。

Сузд で使用されている4つの「同じ年に」の表現のうち、томъ же лѣтъ は最後の使用例が2つ第167葉に見られるのだが、それ以外の例は冒頭の第96葉表と96葉裏に5例が集中しており、3例が第103葉裏から第116葉裏までに収まっている。ПВЛ では最も出現頻度の高かった въ се же лѣто の最後の例は第135葉裏に見つかるのだが、他の6例は第96葉表から第99葉裏までの間に見られるに過ぎない。一方、この形式に取って代わるように въ то же лѣто の頻度が急激に高まる。しかし、これも第138葉裏、つまり Сузд の前半部をやや過ぎたあたりから使用されなくなり、後半部では第166葉に2例出現するのみとなる。そして、第101葉から使用例が散見される того же лѣта が第134葉裏からほぼ独占的に現れる。

以上のことから推定できることは、以下の通りである。すなわち、Лавр において、「同じ年に」を意味する時間表現は、1人称的指示代名詞（「この」）を限定語とする се же лѣто の変化形を使ったものの方が、2人称的指示代名詞（「その」）を限定語とする то же лѣто の変化形を使ったものよりも古い。それから、これらの語結合の対格形が前置詞 въ と結びつく表現が同じ語結合の前置詞を伴わない所格形よりもやや古い形式であるかもしれない。そして того же лѣта は限定語 се が то に取って代わられる時期になって年代記テキストに登場するようになり、въ то же лѣто と томъ же лѣтъ の衰退が決定的になる時期に一般的な表現として定着した⁹。

上記の推定は、НовI における「同じ年に」を意味する時間表現の出現数と分布の調査結果によってその正しさが支持される。ここで問題となっている個々

9 年に関する表現が се же лѣто のタイプから то же лѣто のタイプに推移することは、すでに木下（1989）でも述べられている。すなわち、この論文において著者は、『原初年代記』（『過ぎし年月の物語』）がどのように編纂されたのかを知る手がかりとして4つの代表的な年代記（『ラヴレンチー年代記』、『ノヴゴロド第一年代記・古輯』、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』、『イパーチー年代記』）の記事における се же лѣто タイプの表現と то же лѣто タイプの表現の出現頻度を調査し、二つのタイプの表現の分布に関して一般的な傾向があることを指摘した。それは以下の通りである。

(1) се же лѣто のタイプが то же лѣто のタイプに取って代われ、最終的に того же лѣта しか使われなくなる。

(2) се же лѣто のタイプと то же лѣто のタイプが併用される過渡的な期間がある。

木下が調査の対象としたのは4つの年代記の1016年から1110年までの記事に限られており、本論文で扱う期間よりも遥かに短いのであるが、それでも全体的な傾向は正しく把握されている。ただし、『ノヴゴロド第一年代記・古輯』（НовI）では上記の期間中“се же …”のタイプの例は1つしかなく、すでに“то же”型に移行してしまったように思えるのだが、実は1113年から1132年の記事に“се же …”のタイプが6例見られる。従って、木下が調査対象とした期間は、年に関する表現の全体的な変化について言うと、過渡的な期間なのであった。

の時間表現の НовІ における出現数と Лавр を構成する二つの年代記 ПВЛ と Сузд におけるそれを一つにまとめたものが表 1 である。

НовІ における「同じ年に」という意味の時間表現は Сузд と同じく 5 種類あるのだが、これら二つの年代記に共通しているのは въ се же лѣто, семь же лѣтъ, въ то же лѣто, томъ же лѣтъ, того же лѣта の 4 種類である。指示代名詞 се の変化形が使われた表現の例が少ないことも НовІ と Сузд に共通した現象である。ただし、въ то же лѣто と томъ же лѣтъ の出現頻度の合計と того же лѣта の出現頻度の比率が両年代記では正反対になっている (Сузд 1:2.3, НовІ 2.1:1)。つまり、НовІ の写本は現存する年代記写本のうち最も古いものであるにもかかわらず、少なくとも「同じ年に」という時間表現については、ПВЛほど古い形式が保存されていない。しかし、Сузд と НовІ における GT と非 GT の比率の違いにはそれなりの意味がありそうである。これについては、もう少し後で検討する。

	ПВЛ	Сузд	НовІ
въ се же лѣто	41	7	5
семь же лѣтъ	1	0	2
въ семь же лѣтъ	5	0	0
въ то же лѣто	9	64	132
томъ же лѣтъ	12	10	96
въ томъ же лѣтъ	0	5	0
сега же лѣта	3	0	0
того же лѣта	2	172	109

表 1

ところで、НовІ には 4 種類の筆跡が確認されており、それぞれの部分が筆写された時期もほぼ確定している。すなわち、全167葉のうち第 1 の筆跡で第 1 葉表から第62葉表の途中まで書かれ、第62葉表の続きから第118葉裏までが第 2 の筆跡で引き継がれている。どちらの筆跡も13世紀のものとされている。それから、第119葉表から第167葉裏までが14世紀前半の筆跡で、残りの 3 葉が14世紀後半の筆跡で書かれている (ПСРЛЗ, p. 5)。そして、年の表現の分布は、年代記テキストが書写された時期と一定の相関関係にある。

「同じ年に」という時間表現のうち、指示代名詞 се の変化形を持つ表現 въ се же лѣто と семь же лѣтъ はそれぞれ第13葉裏と第 8 葉表を最後に現れなくなる。つまり、第 1 の筆跡で書かれた部分でも早いうちにこれらの表現が消えるのである。これに対して въ то же лѣто と томъ же лѣтъ は第 1 の筆跡による

部分から第3の筆跡による部分にまで分布しており、その出現数も多い。ただし、第3の筆跡による部分でこれらはそれぞれ4例と2例しか使用されていない。そして、того же лѣтаは第2の筆跡によるテキストから使用されるようになり（第62葉表）、第3の写字生もほとんどの場合にこの表現を利用している。これらのことから、次のように考えることができる。すなわち、指示代名詞 се же лѣто の変化形を使う習慣は13世紀にすでに廃れており、これに代わって въ то же лѣто と томъ же лѣтъ が主流となっていた。того же лѣта も13世紀から年代記テキストで使われるようになり、14世紀になるとほぼ独占的な地位を占めるに至った。

このように Сузд と НовI における「同じ年に」という時間表現の変遷には、ほとんど同じ傾向が見られる。相違点は二つの年代記における GT (того же лѣта) と非 GT (въ то же лѣто ならびに томъ же лѣтъ) の比率なのであるが、ここにそれぞれの年代記が筆写された時代の差が反映されているのかもしれない。もちろん Сузд が1377年に成立し、НовI の大部分が13世紀と14世紀前半の筆跡で書かれているから、後者のテキストの言語の方が古いと単純に決めつけてよいわけではない。しかし、НовI は、「同じ年に」という時間表現が一定の共存期間を経て、交代していくという変遷の図式を Сузд よりも鮮明に提示している。おそらく、Сузд は様々な時代に様々な地域で書かれた資料を多数利用して成立したのに対し、НовI は主としてノヴゴロドで書かれた資料を元にして成立したために言語的な純度が高いのであろう。従って、НовI の方が Сузд よりも後の年代の出来事を記録しているにもかかわらず、言語的には14世紀前半までの特徴を保っており、Сузд には14世紀後半の言語習慣が反映される結果となったと思われる。

ちなみに、「同じ年に」という時間表現の変化と似た現象は、例えば人名の表記についても見ることができる。筆者はかつて年代記テキストを資料として人名 Георгий の東スラヴ語形 Гюрги とそのバリエーション (Юрьи, Юрги など) について正書法と正音法の観点から検討を加え、バリエーション間にある関係を特定しようとした(岡本(2008))。その結果を要約すると以下ようになる。すなわち、НовI では第1の筆跡と第2の筆跡の部分では Гюрги しか使用されず、第3の筆跡によるテキストの最初の部分に少しだけ Гюрги が現れた後、Юрьи という表記に切り替わるのだが、НовI よりも成立年代が遅い『ラヴレンチー年代記』(1377年)、『イパーチー年代記』(15世紀半頃)、『ノヴゴロド第一年代記・新輯』(15世紀中頃または後半) では全体として НовI と同じ傾向が見られるものの Гюр-タイプと Юр(ь)-タイプが記録の年代の新旧に関係なく共存していることが多い。НовI における Гюрги から Юрьи への移行は過渡的な

共存状態がほとんどない、むしろ極端な事例であるかもしれない。しかし、人名の表記の変化と「同じ年に」という時間表現の変遷の間には一つの大きな共通点がある。すなわち、Гюрги から Юрьи に表記が移行するのが第121葉裏であり、въ то же лѣто と томъ же лѣтъ の使用例が激減し、того же лѣта が実質的な標準形式になるのがやはりこの第121葉裏あたりなのである。

なお、НовІ には他にも平行現象を見ることができる。例えば、томъ же лѣтъ が使われなくなるのに呼応して、所格形のみで場所を表すことが可能であったいくつかの都市名が前置詞 въ を必要とするようになる。所格形が単独で場所を意味する状況語となるのは、Кыевъ 「キエフ」、Новъгородъ 「ノヴゴロド」、Володимиръ 「ヴラヂーミル」、Суждаль 「スーズダリ」などの重要な都市に限られているのだが、実際に下記のような例は年代記テキストにおいては珍しくない。例えば、

[例13] Томъ же лѣтъ прѣставися Святопѣлкъ, а Володимиръ сѣдѣ на столѣ **Кыевѣ** (НовІ, 6621, 8) 「同じ年、スヴャトポルクが亡くなり、ヴラヂーミルがキエフで公位に就いた」

[例14] Томъ же лѣтъ, по грѣхомъ нашимъ, измоша кони **Новъгородѣ** и по селомъ, яко нѣлзѣ быше поити смрады никуда же (НовІ, 6711, 64) 「同じ年、わたしたちの罪のために、ノヴゴロドと村々で馬が多数死んでしまい、悪臭のためにどこにも行けないほどであった」

ところが、НовІ では第3の筆跡によって書かれた部分から必ず前置詞 въ が所格の前に置かれるようになる。

[例15] А Володимиръ пришедъ опять, сѣде **в Кыевѣ** (НовІ, 6743, 119) 「一方、ヴラヂーミルは再び帰って来て、キエフで公の座に就いた」

[例16] Оженися князь Олександръ, сынъ Ярославль **в Новъгородѣ**, поя в Полотьскѣ у Брячьслава дочь, и вѣнчася в Торопчи. (НовІ, 6747, 126) 「ヤロスラフの息子「アレクサンドル公がノヴゴロドで結婚した。彼はポロツクのブリャチスラフの娘を娶り、トロペツで式を挙げた」。

以上のように、того же лѣта が「同じ年に」を意味する標準的な形式になる時期は、同義的な表現の数が整理されて一つの表現の使用頻度が高まったり、特定の語彙の正書法に変化が生じたり、場所を表す表現において前置詞の使用が義務的になるなど、中世ロシアの年代記作成の伝統の中でやや大きな転換期

があった時期であるのかもしれない。以下、このことを踏まえた上で、期間を表す他の語彙についても検討してみる。

3.3. зима「冬」、весна「春」、осень「秋」

ある季節に何らかの出来事があったことを表すための時間表現にはいくつかの種類があるが、最も一般的なのは前置詞 **на** と季節の名称の対格形によって作られる前置詞句である。以下にいくつかの例を示す。

[例17]... **а на ту зиму** повоеваша Половци Стародубъ весь (ПВЛ 6604, 81) 「その年の冬にはポロフツィがスタロドゥブ全域を蹂躪した」

[例18] **На ту же зиму** Изяславъ совкупивъся с братьею. поиде на володимерковича в Галичь. (Сузд 6661, 113v) 「同じ年の冬、イジャスラフは兄弟たちと一緒に、ヴラヂーミルの息子を攻めるためにガリチに向かった」

[例19] **На ту же зиму** преставися княгыни Изяславля. (НовІ 6659, 27) 「同じ年の冬にイジャスラフの公妃が逝去した」

[例20] **а на весну** та Переявлявлю. таже Турову. (ПВЛ 6604, 81) 「その年の春に(わたしは)ペレヤスラヴリにもトゥーロフにも(行った)」

[例21] Изяслав же посла по угры. и по Ляхи. **на ту же весну** придоша к нему Угри. (Сузд 6658, 110) 「イジャスラフはウグリ(=ハンガリー人)とリャヒ(=ポーランド人)を呼ぶために人を送り、その年の春になって彼の元にウグリがやって来た」。

[例22] **а на весну** ходи Всъволодь съ новгородъци на Емь (НовІ 6631, 110v)

[例23] **и на ту осень**. идохом с черниговци. и с Половци. с читъевичи. и к Мъньску. (ПВЛ 6604, 81v) 「その秋にわたしたちはチェルニゴフの人々とポロフツィとチテエヴィチと共にミンスクに向かった」

[例24] **на ту же осень** увѣдавъ оже идеть Ярополкъ съ братьею к Чернигову. и иде тамо же. (Сузд 6643, 100m) 「同じ年の春に、彼はヤロポルクが兄弟たちと共にチェルニゴフに向かっていることを知り、そこへ向かった」。

[例25] **на ту же осень** придоша полочяне съ Литвою на Луки и пожьгоша хоромы, а лучяне устерегошася и избыша въ городъ (НовІ 6706, 60v) 「同じ年の秋にポロツクの人々がリトヴァ(の人々)とともにルキを攻め、家々に火を付けた。一方、ルキノ人々は警戒しており、町の中にいて無事であった」

季節の名称は2人称的指示代名詞 **тъ** の変化形とともに GT を形成する。ПВЛには **тое же зимы**, Суздには **тое же весны**, **тое же зимы**, НовІには **тои**

(же) весны, тоѣ (же) весны, тои же зимы, тоя зимы の例がある。ただし、осень「秋」については、Новѣにのみ тои же осени / осѣни が 7 例見られる、これが GT であるのか、それとも前置詞を伴わない所格形であるのかを形式的に区別する方法はない。しかし、Новѣにおける“тои же+季節の名称”の使用例の分布を見れば一つの仮説を導くことができる。表 2 が示すように зима「冬」の場合、第28葉表から第112葉裏までの12例がすべて所格形 зимѣ / зиме であり、第128葉表からの15例が生格形 зимы なのである。весна「春」は出現数が зима よりも遥かに少ないのだが、やはり最初の 4 例が生格形で最後の 5 例目だけが所格形になっている。つまり、時間表現で тои же が所格形と結びつくのはこの年代記の第 1 および第 2 の筆跡（いずれも13世紀のもの）で書かれた部分に限られていて、第 3 の筆跡（14世紀前半）では指示代名詞の同一の変化形が生格と結びついているのである。従って、тои же осени も第115葉表の例までは所格であって、第136葉裏の最後の例のみが GT であると推定することができる。

тои же зимѣ / зиме	28, 31v, 33, 47, 55, 56, 58v, 93, 101v, 107, 109v, 112v
тои же зимы	128, 128, 136, 136v, 136v, 136v, 137, 137, 156, 158v, 158v, 163v, 164v, 166, 166v
тои же веснѣ / весне	28v, 30, 60, 87v
тои же весны	156v
тои же осени	31, 55v, 81, 105v, 106v, 115, 136v

表 2

Новѣで一義的に 2 人称的指示代名詞の女性単数生格形だと特定できる語形としては、тоя が 2 例、тоѣ が 1 例しかないことから、この年代記ではもっぱら тои が生格と所格として使われていると見なしてよい（与格の例はない）。なお、第 2 の筆跡による部分には тои весны (110) という例が 1 つあり（тои は生格）、第 3 の筆跡による部分に на тои же недѣли (166v) という例がやはり 1 つだけ見られる（тои は所格）ことから、13世紀の写字生によるテキストでは тои が単数女性所格であり、14世紀の筆跡によって書き写された記録では тои が単数女性生格であるという一般的な傾向があるにもかかわらず、名詞が生格形であることがはっきりとしていたり、生格と結びつかない前置詞 на が使われていたりして、文法的な曖昧さが排除される場合には、例外が許容され、その一方で、文法的特性にかんして曖昧な語形については、一般的な傾向に従うことになっていたと思われる。

季節の名称を使った時間表現にも лѣто の場合と同じように形式の移り変わ

りが観察される。先ず、年代記作成の古い伝統が受け継がれていると思われる ПВЛ には、「春に」、「冬に」といった季節の表現の例があまり多くない。そして、季節の名称が前置詞を伴わない所格形で表されることを基本としている。ところが、ПВЛ の最後の部分である6604年の記事に挿入された『モノマフの教訓』から на と季節の名称の対格形による時間表現が現れるようになる。そして、この表現形式は Сузд に受け継がれるのだが、すでに“на+対格”と平行して GT が多用されるようになる。季節の表現に関しても Новл では на (ту же) зиму のタイプの方が GT よりも出現頻度が高く、Сузд では GT の方が多いというように、лѣто を使った時間表現の場合と極めて似た推移を示している。

3.4. мѣсяць 「月」

前置詞を伴わない мѣсяць の生格形は頻繁に見られ、本論文で調査対象としたどの年代記でも「年」の意味の лѣто を使った GT よりも遥かに例が多い。基本的な用法は以下の通りである。

[例26] Преставися Всеславъ Половьцьскыи князь. мѣца. априля. въ 14 д(е)нь. въ 9 час дне. въ среду. (ПВЛ 6609, 92v) 「ポロヴェツ [ポロツクの誤り] の公フセスラフが4月14日、一日の第9刻に逝去した。水曜日のことであった」

[例27] Тое же зимы явися знамение в лунѣ. мѣца. декб. в 24 д(е)нь. на память с(вя)тое м(у)ч(ни)ци. Евгеньи. (Сузд 6709, 141) 「同じ年の冬、月に徴が現れた。12月24日、聖殉教者エウゲニヤの記念日のことであった」

[例28] Мѣсяця июля въ 3, зажъжена бысть церкы от грома Варязьская на Търговищи, по вечернии, въ час 10 дни. (Новл 6689, 44) 「7月3日、トルゴヴィシチェにあるヴァリャーギ教会が晩禱の後、一日の第10刻に雷のために燃え上がった」

これらの例に見られるように、“мѣсяця (мѣсяца) +月の名称+日付表現 (въと日付の対格形)” という様式が圧倒的に多い。そして、лѣто や季節の名称の場合と違い、前置詞を伴わない所格形や前置詞 въ あるいは на と対格形との結合による時間表現がほとんどない。従って、表現形式の変遷も観察されず、年代記の古い伝統が維持されている ПВЛ でもルーシの受洗以降の年代の記録には屢々現れている。つまり、早い時代にこの生格の用法は年代記記述の慣習に定着していたと考えて差し支えないのだろう。мѣсяця の前後に月の名称がない例はいくつか見られるのだが、この場合でもふつうは日付の表現 (въ+数字¹⁰ (+день)) を伴っている。純粹に「同じ月に」という言い方がなされてい

る例は、ПВЛの後半部に見つかる3例のみである。それらは、以下の通りである。

〔例29〕 **Сего же мсца.** приде Тугорканъ тесть С(вя)тополчъ мсца. мая 30. (6604, 77)「この月のこと。スヴァトポルクの妻の父であるトゥゴルカンが5月30日にやって来た」

〔例30〕 **Выииде Мстиславъ от Д(а)в(и)да на море. мсца. июня въ 10. том же мсци.** брат(ъ)я створиша миръ межи собою. С(вя)тополкъ. Володимеръ. Д(а)в(и)дъ. Олегъ. въ Увѣтичих. мсца. авгус. во 10 д(е)нь... (6608, 92)「ムスチスラフは6月10日にダヴィドのところから海に出た。同じ月のこと。スヴァトポルク、ヴラヂーミル、ダヴィド、オレグがウヴェチチで自分たちの間で和を結んだ。8月10日のことであった」

〔例31〕 **Выбѣже Ярославъ Ярополчичъ. ис Кыева. мсца. октяб. въ 1. Тогоже мсца.** На исходѣ прелстивъ Ярославъ Стополчичъ. Ярослава Ярополчича. и ятъ и на Нурѣ. и приведе и къ о(тъ)цю С(вя)тополку. и оковаша и. (6610, 92v)「ヤロポルクの息子ヤロスラフが10月1日にキエフから逃走した。同じ月のこと。月の終わりにスヴァトポルクの息子ヤロスラフはヤロポルクの息子ヤロスラフを騙して、ヌラ川の畔で彼を捕らえ、彼を父のスヴァトポルクのところへ連れて行き、彼に枷をはめた」

上記の例のうち、例29と例31は状況語としての独立性を持った語結合でありGTの機能を果たしているように思える。また、例30は「年」や季節の名称を表す名詞の場合と同じように、GTと競合関係にある所格結合であるように思える。しかし、例29と例30の前後には一般的な日付表現、つまり“мѣсяця (мѣсяца) + 月の名称 + 日付表現”が必ず書かれていて、状況語としての生格結語および所格結合の時間表現としての価値が薄まっている。特に例30は、前の文で伝えられる出来事が6月に起き、後続の文で伝えられる事件が8月に起きているので、「同じ月に」という表現がどの月のことなのかがわからない。つまりこの表現は文脈との結びつきが断たれているので、テキストを理解する上での障害となってしまう¹¹。例31の“тогоже мсца”(=того же мѣсяця)は、

10 ロシア年代記において、数字はキリル文字アルファベットで表記されていたのだが、本論文では便宜上算用数字を使用する。

11 ПВЛの邦訳『ロシア原初年代記』(1987年)ではこの部分を以下のように訳している。「ムスチスラフ [F21] は六月十日にダヴィド [F1] のところから海に出た。この年の八月十日に、兄弟たち、スヴァトポルク [B3]、ヴラヂミル [D1]、ダヴィド [C3]、オレグ [C4] がウヴェチチ

最初の文字が大文字で始まり、この表現の直後の前置詞句“*На исходѣ*”「(月の終わりに)」も大文字で始まっている¹²。従って、「同じ月に」という表現は表記の上で独立しているという点で「同じ年に」と同じように事件の記述を開始する目印の役目を果たしている。しかし、“*на исходѣ*”という前置詞句が“*тогоже мѣца*”に意味の上で強く依存していることを考慮すると、これは現代語の感覚では“*на исходѣ того же мѣсяця*”となるべきところなのだが、何らかの理由で生格結合が独立成分として前置されたと考えることができる。つまり、ある出来事が生じた時点が属する期間を生格形で事件の記述の前に提示することが年代記記述において習慣化していたのかもしれない。年や季節によるGTは文中における他の文成分との結びつきが“*тогоже мѣца*”と“*на исходѣ*”の場合ほど緊密ではないため、「同じ月に」という時間表現は、文の状況語として機能する(述語に対して副詞として機能する)GTと同一視してはならないと思われる。

年代記テキストに多数の例が見られる“*мѣсяця (мѣсяца)* + 月の名称 + 日付表現”という結合においても、生格形 *мѣсяця* と日付表現は“*Тогоже мѣца. На исходѣ*”の場合と同じように名詞を限定する生格が前置されたものだと考えた方がよい。なぜなら、日付と月とは意味の上で密接な関係を持っていて文成分として一つのまとまりを形成しているからである。年や季節を意味する名詞のGTの例があまり見られないПВЛにおいて月の生格形による時間表現の例のみが目立って多く現れ、この表現と意味の上で競合する他の形式が稀にしか見られず、また複数の年代記テキストを比較しても月の時間表現には形式の推移が観察されないことから、これは年代記記述の古い伝統に属する様式であり、時代の移り変わりに関係なく、独占的に使われ続けたのだと結論づけることができる。

ちなみに、月および月の名称の生格が日付の前に置かれるのは、ギリシャ語の習慣が受け継がれたことに原因があるのかもしれない。George (2014) には紀元後46年のあるパピルス古文書に書かれた記録の中に見出しが月の属格で始まり (*μηνὸς Σεβαστοῦ* 「Augustus の月に」)、これに続く部分に数値を表すアルファベットの小見出しがあって、それが日付を意味しているという例が紹介されている (p. 236)。ルーシにおける年代記作成がビザンツ文化の影響で始まっ

チにおいて互いに輪を結んだ」。つまり、訳文中の「この年の」にあたる表現(ПВЛ 第92葉の前後で一般的な形式は *томъ же лѣтъ* か *въ то же лѣто*) は書かれていないのだが、「同じ月に」では文脈上不自然であるため、おそらく意図的に「この年の(八月十日に)」と訳された。

12 ПВЛの写真版(Повесть временных лет по Лаврентьевскому списку. Санктпетербург. 1872.)で確認した。

たことには疑う余地がないのだが、手本とされた筈のゲオルギオス・ハマルトロスなどによるビザンツの年代記には、年月日のような細かい記述がない。実際に文献時代初期のルーシの年代記作家や写字生が何を手本にして東スラヴの地に起こった出来事を記録していったのかについてはよくわかっていないのである。しかし、ギリシャの古典期以降の非文学的な文書で月の属格形が記録の見出しとなるという事実があったということは示唆的であって、日付表現としてこの様式がルーシにおける年代記記述に取り入れられた可能性が高い。

3.5. день「昼」、「日」と ночь, ношь「夜」

день, ночь / ношь には形態上の共通点がある。すでに検討した季節の名称 осень と同じく、単数の生格と所格が同じ形式を持っているのである。従って、格語尾だけで文法特性を決定できない場合は、季節の名称による時間表現に見られた形式の推移の一般的な傾向を参考にする。

день (днь) は лѣто と同じく多義的な語彙であり、1日の構成部分である「昼」と1日全体と意味する。例えば、день и ночь のように ночь, ношь「夜」と共に使われていれば、день は必ず「昼」を意味しているのだが、多くの場合、この単語は「日」を意味している。そして、「日」を意味する день は GT を形成する。GT の例はあまり多くなく、ПВЛ に сего же дне という例が1つ、Сузд では того (же) дне が7例と того (же) дни が2例、НовІ では того же дне と того дни が1例ずつ見つけられるに過ぎない。これに競合する形式には前置詞 въ および на と対格形によって作られるものと、前置詞を伴わない対格形によるもの、そして前置詞を伴わない所格形による томъ же дне および томъ же дни (ただし НовІ のみ) とがある。

день による時間表現で最も特徴的なのは、“въ+対格”のタイプの例が圧倒的に多いことである。特に、記録文献である年代記に頻繁に現れる日付には、専らこの形式が使われる。

[例32] Мѣсяця августа въ 11 (=первыи на десяте) день, перед вечерню, почя убывати солнца, и погыбе всѣ; о, великъ страхъ, и тьма бысть, и звѣзды быша и мѣсяць (НовІ 6632, 10v) 「8月11日のこと、晩禱の前に太陽が欠け始め、全てが無くなってしまった。ああ、大いなる恐怖と闇があり、星と月が出たのであった」

ночь による時間表現には、前置詞 въ と対格形が結びついた въ ночь、同じ前置詞と所格形が結びついた въ нощи、前置詞を伴わない対格形 ночь / ношь、前置詞を伴わない造格形 ночью、明らかな GT である тое ночи、そして形態上文

法特性の判別できない *ночи / нощи* および *тои (же) ночи / нощи* がある。

文法特性の判別ができない形式について、前節の季節の名称を使った時間表現に見られた一般的な傾向を当てはめてみると、ПВЛ の *тои нощи* (86) と *си нощи* (89) は所格、Сузд に 4 例ある *ночи* (123, 155v, 170v) と *нощи* (99) は GT、НовІ の *тои нощи* (1), *тои же нощи* (26v, 103v), *тои нощи* (86) は所格で *тои же ночи* (139v) が GT だということになる。

3.6. *недѣля* 「週」、「主日」

「主日」の意味で使われている *недѣля* は、“*въ*+対格”となる。一方、この名詞が「週」を意味している時には、“*на*+所格”の結合が時間表現として使われる。

[例33] 「主日」: Бысть дѣжгь съ градомъ июня въ 27, **в недѣлю**, и зажьже громъ церковь святыя Богородица въ Зверьници манастирь. (НовІ 6656, 25) 「雹まじりの雨が6月27日の主日にあり、雷がズヴェリニツェの修道院の聖母教会に火をつけた」

[例34] 「週」: *тои же зимы приѣхаша послове от митрополита из Вельньской земли Федорко и Семенко, на страстной недѣли*, позывать на ставление (НовІ 6838, 166v) 「同じ年の冬に府主教からの使者フェドルコとセメンコがヴォリニの地から(彼を)叙任に召還するために受難週にやって来た」

また *тое же недѣли* のように明らかに GT だと判断される時間表現における *недѣля* も「週」を意味している。

[例35] Умре с(ы)нъ Д(а)в(и)д(о)въ Муромьскаго. м(ѣ)сяца. априля. с(вя)тыя нед(ѣ)ля праздниа. **Тое же недли** преставися и сам Д(а)в(и)дъ Муромскыи в черньчих и в скимѣ (Сузд 6786, 155) 「ムーロムのダヴィドの息子が4月の聖なる祝いの週(=復活祭の週)に死んだ。同じ週にムーロムのダヴィド自身も修道籍に入りスヒマ僧の姿をして逝去した」

ただし、*недѣля* という名詞も *осень* や *ночь* と同じように単数の生格と所格が同じ語尾形式をとるため、常に上の例のように限定語の語尾形式によって格であることが判断できるとは限らない。もし *осени* の場合のように、季節の表現における格形式の推移にもとづいて格を推定するならば、НовІ の *тои же недѣли* (54), *сыропустныя недѣли* (107v) の *недѣли* はいずれも所格だと言うこ

となる。一方、ПВЛとСуздには所格形が状況語として機能している例がない。ただし、Суздには先に挙げた第155葉表の例の他にも明らかに生格の形式を持つ結合がいくつか見られる。それらは“тоѣж недѣ” (157)、“стрстныя недѣли”「受難週に」(167)、“пороздноѣ недѣлѣ”「復活祭の週に」(154)、“с(вя)тѣ бя недѣля праздныя” (155) である。

それでは、Суздに見られる生格結合による5つの時間表現が全てGTなのかというと、必ずしもそうとは言えない。ここでもう一つの問題が生ずる。СуздおよびНовIでは、「週」の意味で使われているнедѣляは曜日と密接な関係を持っていて、生格形недѣлиが曜日に後置されて限定語となることが珍しくない。例えば、мѣца февралѣ въ 28 д(е)нь в сред сырное недѣли「2月28日、謝肉祭の週の水曜日に」(Сузд 6714, 145); въ понедѣльникъ вербной недѣли「柳の週の月曜日に」(НовI 6712, 69)のように。日付の表現に教会暦の情報が書き込まれるようになるのは、ПВЛに同じような例がないことから、年代記記述の新しい伝統に属するのかもしれないが、「月」の場合と同じように、期間を意味する名詞とその期間を構成する時間帯を意味する名詞が並んでいれば、それらの語順にかかわらず生格結合は名詞を限定している、つまりGTではないと考えてもよいのではなからうか。そうであれば、先に挙げたСуздの生格結合の例のうち“стрстныя недѣли” (167)は、直後に“въ сред”「水曜日に」が続いているので、GTではないということになる。

4. まとめ

ロシア年代記には、13世紀以前に書かれた写本が現存していないので文献資料による確認ができないのだが、GTがПВЛであまり普及しておらず、СуздやНовIでは出現頻度が高くなることから、生格のこの用法は文語、すなわち古教会スラヴ語から継承されたものではなく、またビザンツの年代記の語法、つまりギリシャ語の語法の模倣でもない。GTは、ギリシャ語やゲルマン諸語では珍しくなく、スラヴ祖語にも最初から存在したと思われるのだが、スラヴ人の最初の文語である古教会スラヴ語にはなぜか採用されなかった。このため、ルーシの初期の文献でも使用されておらず、おそらく13世紀になってから書き言葉に取り入れられるようになったようである。それまでGTは、話し言葉に特有の生格の用法であり続け、近代まで口語のレベルで保存されており、現代ロシア語成立前夜の18世紀初頭にはこの用法が適用される語彙の範囲を拡大したのだが、最終的に標準文章語から閉め出されてしまった。このことは、ロモノソフの文法に象徴されるように、標準文章語が教会スラヴ語を志向していることを証明しているのかもしれない。

参考文献

- George (2014) — Coulter H. George, *Expressions of Time in Ancient Greek* (Cambridge Classical Studies). Cambridge.
- Grannes (1986) — Alf Grannes, “*Genitivus temporis* in Early 18th Century Russian”. *Russian Linguistics* 10, 53-60. Dordrecht.
- Issatschenko (1983) — Alexander Issatschenko, *Geschichte der russischen Sprache. 2. Band. Das 17. und 18. Jahrhundert*. Heidelberg.
- Večerka (1989) — Radoslav Večerka, *Altkirchenslavische (Altbulgarische) Syntax. I. Die lineare Satzorganisation*. Freiburg i. Br.
- Ломтев (1956) — Ломтев Т. П., Очерки по историческому синтаксису русского языка. Москва.
- Присёлков (1996) — Присёлков М. А., История русского летописания XI-XV вв. Санкт-Петербург.
- ПСРЛ1 — Полное собрание русских летописей. Том I. Лаврентьевская летопись. Москва. 1997.
- ПСРЛ3 — Полное собрание русских летописей. Том III. Новгородская первая летопись. Москва. 2000.
- ConcNov — 中條直樹・酒井純編 (1998)、『ノヴゴロド第一年代記』(シノド本) コンコーダンス (平成7-9年度・文部科学省研究費補助金による研究成果。課題番号07301080)。名古屋。
- ConcPVL — 中條直樹・酒井純編 (1998)、『ロシア原初年代記』コンコーダンス I, II (平成7-9年度・文部科学省研究費補助金による研究成果。課題番号07301080)。名古屋。
- ConcSuzd — 中條直樹・酒井純編 (2001)、『スーズダリ年代記』(ラヴレンチー年代記) コンコーダンス (平成10-12年度・文部科学省研究費補助金による研究成果。課題番号104101108)。名古屋。
- 岡本 (2008) — 岡本崇男、「人名 ГЮРГИ の表記をめぐって」。神戸外大論叢第59巻第2号。